

浜松のまちが戦後の焼け野原から、ようやく立ち直り始めた昭和25年（1950年）。この年9月

に松城町（現在の浜松城公園）で開かれた「浜松こども博覧会」跡地で、同年

11月に開園したのが浜松市動物園です。「開園当時は『ゾウのいる動物園』とし

て人気を呼び、子どもたちがゾウ

の前で弁当を広げる風景がよく見られました」。園長の渥美雄一さんは、そう語ります。

このころの浜松市動物園は小ぢんまりとした規模で、現在、芝生公園となっている場所にゾウやライオンなどの獣舎がありました。

下の写真に写っているのは、インドゾウの初代「浜子」。彼女の巨体にはいささか小さすぎる台の上に乗れ、長い鼻でラッパを巻き付ける姿は愛敬たっぷりです。

「当時の動物園はシヨロ的な要素が求められ、ゾウの浜子もいろいろな芸を披露していました。今では考えられないことですが、このころはまだ、のんびりした時代だったのですね」

開園以来、動物園は浜松の子どもたちから絶大な人気を集めました。だが、やがて施設は老朽化し、敷



わが心の浜松

昭和25年

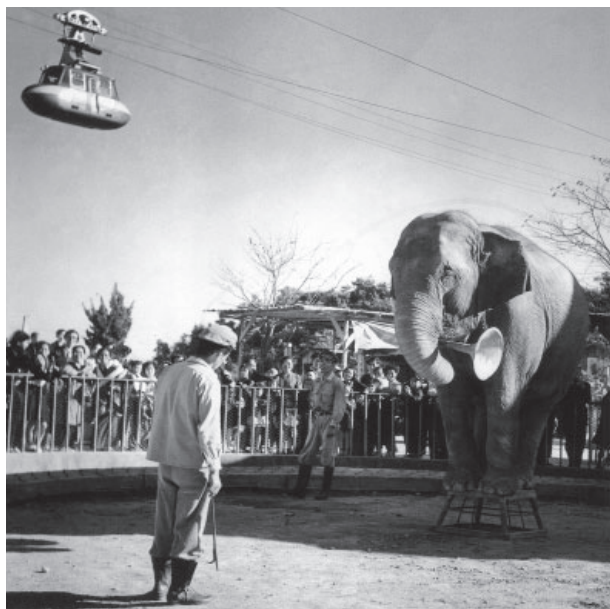
ゾウの初代「浜子」が人気者に 浜松市動物園の開園

地も手狭になってきました。そこで昭和58年（1983年）、フラワーパークに隣接した西区館山寺町の現在地への引っ越しが行われます。しかし、動物たちを輸送するのは大変な作業。中でも苦労したのは、背の高さが4メートル以上あるキリンでした。

輸送方法は、キリンの入った特製の檻を超低床トレーラーに積み込み、時速20キロの低速で引っ越し先まで運ぶというもの。出発前にキリンが興奮し、檻にはってあつ

た厚さ16ミリの板をけり破るという騒ぎもありましたが、当時の担当者には丸1日かけて、困難な輸送作業をやり遂げました。

「広い敷地に移転したことで、檻の代わりに堀や水を隔壁にした現在のスタイルを実現。その後、レッサーパンダ、ユキヒヨウ、ゴールデンライオンタマリンなどの希少動物も仲間入りし、現在に至っています。今後は、そうした希少動物の繁殖と種の保存を図るとともに、国内外の動物園と協力して調査研

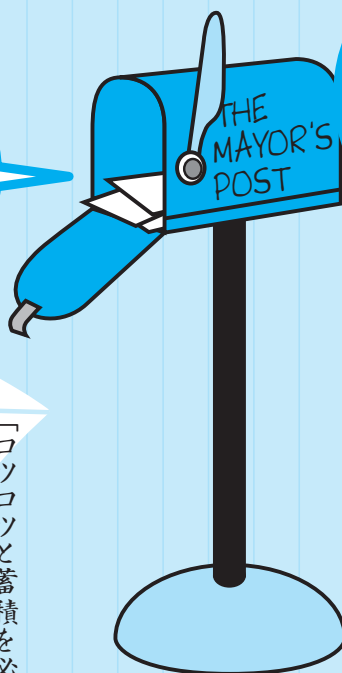


究を実施。同時に、子どもたちに生命の大切さを伝えるための教育に力を入れていきたい」と、渥美さんは話しています。

昭和30年代の浜松市動物園。空中ケーブルカーが当時の様子をしのばせます



森林行政のさらなる改革を



市長への手紙

前号は、浜松の森林を未来につなげていくためのさまざまな活動を集めました。この問題について、佐久間町浦川にお住まいの方の意見をご紹介します。（誌面の都合で内容を一部編集しています）。

「コツコツと蓄積を必要とする産業」といえば、まず思い浮かぶのは農業。農業は、わたしたちに生きるための「食」を与えてくれる産業です。それと同様に、林業は天の恵みを受け、多種多様な宝物を与えてくれます。

森林には「法正林（毎年の成長量に合わせて木を伐採・植林し、持続的な経営を行っている森林）」があり、そこでは間伐により山を育てています。ゆえに、百年、二百年、千年の山を育てることができません。

そこから得られる多種多様な宝物とは、例えば、幼児教育の場、芸術のためのアトリエ、静養の場などがあります。

日本列島のおよそ7割を占める森林は、あちらに点々、こちらに点々と散らばっている小さな集落が守ってきたものです。

今、その尊い森林が、林業従事者の高齢化や、後継者の不足によって荒廃しようとしています。それを防ぐため、森林行政の改革を今後も進めていきたいと願っております。

（今回は「浜松市の地球温暖化対策」をテーマに、市長への手紙を広聴広報課まで郵便、ファクス、電子メールでお願いします。字数は300字程度。匿名でも構いません。住所などは裏表紙に記載しています。締め切りは平成21年11月20日）

※当コーナーへ寄せられた主なお手紙は次回の誌面で紹介させていただきます。なお、個別に回答はいたしません。

特集タイトルの由来

地球が静止する日
The Day the Earth Stood Still
(2008年制作の米SF映画)

人々の努力次第で
地球は蘇る

1951年に制作された名作映画のリメイク版。ある日、ニューヨークに巨大な球体が舞い降り、その中から一人の男と大きなロボットが現れます。男の目的は「地球を人類から救う」こと。やがてロボットは、地上のあらゆる人工物を破壊していくのです。翻って現実を見ると、地球は温暖化でまさに悲鳴を上げているように思えます。このままだと人類が破滅しかねない状況は、映画の世界と重なり合うでしょう。「いや、人々の努力次第で地球は再生できるはずだ」。そんな思いを今回のタイトルに込めました。